

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月10日現在

機関番号：31201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K17190

研究課題名（和文）生殖補助医療後の出生前診断の経験についてのインタビュー調査

研究課題名（英文）An interview research regarding women's prenatal testing experiences after assisted reproductive technology

研究代表者

山本 佳世乃（Yamamoto, Kayono）

岩手医科大学・医学部・特任講師

研究者番号：90559155

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：医療現場に留まらない日常生活の中における妊婦のNIPT受検経験をj知るためライフストーリー法によるインタビュー調査を実施した。妊娠方法による経験の違いも知るため対象は、自然妊娠群9名、不妊治療後妊娠群6名とした。解析の結果両群ともに他者や社会に関する語りが多かった。全例で「夫」、「親」、「胎児」についての語りが見られ、90%が「インターネット」について言及した。両群ともに「親戚」や「友人」、「職場」等との関わりの中でNIPTを経験しているという特徴が明らかとなった。不妊治療の有無に関わらず共通点は多く、相違は妊娠方法より「切迫流産」などの語り手の個別の経験によるところが大きいことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

妊婦のNIPT受検経験においては、家族や周囲の人、社会といった「他者」が大きな影響をもっていることが明らかとなった。妊娠は妊婦の体内で経験されるごく個人的な出来事であると同時に、社会との相互作用によって形作られるものでもある。本研究によって参加者を取り巻く社会的な状況、キーパーソンを把握できるとともに、検査の情報源やNIPTの社会的側面について明らかにできる可能性が示唆された。また、自然妊娠群と生殖補助医療を受けた群との間では共通するカテゴリが多い一方で、一人ひとりの語りには個別性が見られたことから妊娠方法によらずクライアントのもつ背景の多様性に目を向けた対応が必要であろう。

研究成果の概要（英文）：We focused on how women who have experienced NIPT in their daily lives, beyond specific medical situations. The participants were 9 women with natural pregnancies and 6 who underwent assisted reproductive technology. Consequently I gathered narratives which covered a broad range of topics that including many social context and people related to the participants in both study groups. Narratives involving the “husband,” “parents,” and “fetus” were found in all cases and over 90% of our participants mentioned “using the internet.” There were also narratives regarding “relatives,” “friends” and “people at work.” This study suggested that the ramifications of the women's NIPT extended to the entire framework of their complex human relationships. It was patients' unique experiences, such as “threatened miscarriage” rather than the different methods of achieving pregnancy which appeared to have the most impact on the patients.

研究分野：遺伝カウンセリング学

キーワード：遺伝カウンセリング 出生前検査 妊婦の経験 生殖補助医療 自然妊娠

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19, CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2013年4月1日より、本邦においても新型出生前診断(NIPT: Non-invasive prenatal testing)が実施されており、本研究開始前の報告(2014年6月)では7500名以上が受検していた。本検査は、母体血中の胎児DNAを調べることで、胎児が21トリソミー(ダウン症候群)、18トリソミー、13トリソミーの3疾患に罹患している確率を算定しうる出生前検査の一種である。受検可能な妊婦は、胎児に該当疾患のおそれが指摘された方、該当の染色体異常症の児を妊娠または出産した経験のある方、高齢妊娠の方である。NIPTの受検には、遺伝カウンセリングを受けることが必須とされている。NIPT受検希望者の背景は様々だが、NIPTの最も多い受検理由は高齢妊娠であり、そのなかには生殖補助医療(ART: Artificial reproductive technology)を受けたクライアントも含まれている。生殖補助医療を受けた妊娠では、自然妊娠に比較して高齢妊娠となる率が高いことが知られている。生殖補助医療による出生数は年々増加している。2012年度の統計では、全妊娠の3.7%を占めており、その数は増加傾向にある^{1,2}。そのため、生殖補助医療を受けた後に、NIPTを受検する人々が少なからず存在しており、岩手医科大学の統計では全体の約18%を占めている。ARTによる妊娠、特にIVF/ICSIの場合には、多くの女性は不妊の状態を経験し、数ヶ月から時に数年にわたって侵襲的な治療を受けている。その経験が出生前診断についての捉え方に影響を及ぼしていることが推測されるが、生殖補助医療を受けた妊娠と自然妊娠との出生前診断についての意識や経験の違いを調査した研究はいまだ少なく、NIPTについては報告が存在していなかった。

2. 研究の目的

生殖補助医療を受けた妊娠は高齢妊娠となりやすいことから、出生前診断の適応となりえる。しかし、生殖補助医療を受けた妊娠と自然妊娠との出生前診断についての意識や経験の違いを調査した研究はいまだ少なく、新型出生前診断(NIPT)については報告が存在していない。出生前診断受検については「後ろめたさを感じる」といった報告もあり、また家族・社会による影響も大きいとされている。生殖補助医療を受けた妊娠、特に体外受精や顕微受精(IVF/ICSI)では、女性は数ヶ月から数年にわたる侵襲的な治療を受けており、その経験により、出生前診断の経験がより複雑なものになっている可能性がある。またNIPTは医療的検査であるが、妊婦がこの検査を日常の生活世界においてどのように経験しているのか、その全体像も明らかとなっていなかったことから、妊婦におけるNIPTの包括的経験を把握することも本研究の目的の一つとした。当事者へのよりよい支援を目的として、侵襲性の低いとされる方法でインタビュー調査を行った。

3. 研究の方法

家族歴・胎児異常指摘なしのNIPT陰性例の妊婦を対象とし、NIPT結果説明後に岩手医科大学遺伝科外来にて募集を行った。NIPTを受検したクライアントのうち、生殖補助医療を受けた群3-5名、自然妊娠群3-5名に対して、ライフストーリー法をもとにしたインタビューを実施する予定としていた。インタビューは、ライフストーリーインタビュー法にもとづき行った。質問項目を詳細に定めないこの手法は、探索的分野においてクライアントの経験を包括的に引き出す際に用いられている。インタビューの導入は、「出生前検査を受けようと考えはじめたあたりから現在までのご経験を伺います。お話しくださることはご自身やご家族が経験されてきた事どのようなお話でも構いません。決められた質問に答えていただく方式ではなく、これまでを振り返りながら自由にお話しいただければと思います。お話しになりたくないことを無

理に伺うことはありません」とした。インタビューの進行は語り手主導で行われたが、語り手が聞き手からの誘導を待つ場合には、聞き手からの時系列を進めるための具体性の低い質問（表 1）と、語り手から語られた内容に対する質問によりインタビューを進行した。時系列を進めるための質問「どうでしたか」「どうでしたでしょうか」「いかがでしたか」「どうだったでしょうか」「どんな感じで」等の類似表現も含む）は、語る内容を具体的に指示しないため、自身の心理面や体調への言及、家族や職場での経験など人によって語る内容が大きく異なる。それにより、語り手独自の経験を知るのに役立つ。「どうでしたか」で何を話せばよいかわからない語り手に対しては、「その頃のことや印象深かったことや考えていたこと、経験した出来事などを教えてください」と補足した。

4. 研究成果

2016年2月-11月に57名に対して募集を行い11名に対してインタビューを実施した。この時点で、生殖補助医療を受けた群が想定人数に達しなかったことから、その後も生殖補助医療を受けた妊婦11例に対して追加の研修参加募集を行い4名が参加した。インタビューの所要時間は約30分-150分、インタビュー実施時期は妊娠15週から32週だった。インタビューは、語り手のご都合に応じて岩手医科大学もしくは語り手のご自宅で実施した。

【解析手法の検討】

山本³によるライフストーリーの分析指標をもとにした分析を検討した。この分類法は、語りを<物語世界：あの時、あの場で起きた筋道のある話>と<ストーリー領域：インタビューとインタビュアーとの今この場での会話、物語世界への評価や語りの動機>の二つの位相を合わせ持つものとして分析を行う桜井の対話的構築主義に基づくライフストーリー研究法^{4,5}に立脚して開発されたものである。【分析1】「ライフストーリーに対する意味づけ」ではその指標を用いて、出生前診断を受検した当事者にとって、その一連の流れのなかで重要だった体験は何なのかを当事者自身の言葉から把握した。【分析2】「ライフナラティブ」では、語りの内容がどのような順番で、どのような聞き手-語り手のやり取りを通じて語られたのかという語りのプロセスと、インタビュー時点の聞き手-語り手の関係性を反映した会話、語りの動機等を解析した。【分析3】「ライフストーリー内の他者」では、語りの中に表れる人物（夫、親、親戚、友人、勤め先の人、近所の人、医療者等）についての語りに着目することで、語り手が経験している社会の実情を明らかにすることを目的とした。ライフストーリーから、語り手が他者もしくは社会について直接的に言及している部分を発話内容から抽出し、1) 家族・2) 特定の他者(主治医など)・3) 世間/社会(不特定多数の他者・マスコミなど)に分類し解析を行った。なお、結果部分の発話につけた番号は語り手の通し番号である。

【結果・考察】

はじめに【分析2】としてインタビュー開始から終了にいたるまで、いかなる内容がどのような順番で表れていたのかの把握を行った。その結果、インタビューで語られる内容の順序は、基本的に「時系列を進めるための質問項目」(表1)に沿ったものとなっており、時系列の順序において大きな逸脱は見られなかった。次に、それぞれの時期に経験されたこと「何についての話なのか」という視点からカテゴリ化した。全ての語り手に共通して表れていた語りは、「検査の感想」、「年齢についての言及」、「胎児について」だった。「ダウン症」と「障がい」については2つのカテゴリを合わせると全例で語られていた。その他に、「切迫流産」、「不妊

治療」等のカテゴリが見られた。

次に、【分析 1】を実施した。【分析 1】では主に、異なる時期の出来事についてのストーリーを比較することで人生全般に対する意味づけを生成していく語りを抽出した。今回報告した語りは自然妊娠例など短い場合には妊娠前後からインタビュー時までの 5-6 か月間の比較的短期間の経験であったこともあり、【分析 1】に該当する語りは少なかった。しかし、「[子連れで再婚後妊娠して]すごく今回検査のことで/家族に、なれたかなって。//色々とあらためて、あらためて色んなことを/考えられたかなってという、この検査に挑むってということが。(0007)」、他にも「ほんとに考えた時間だったなあとと思いますほんとに結果が良かったっていうのはあるんだと思うんだけども/ほんとにこう考えられたし/色んな人の見方とか気持ちとかを、ああこういう風に思うんだなあとか/ちょっと色んな多角的に物事を見れる、見れた時間じゃないかなと思います自分にとっても(00011)」といったように NIPT 受検経験が、子どもをもつことや家族そのものについてあらためて考えるきっかけになったとの語りが見られた。

【分析 2】の聞き手 - 語り手関係として、カテゴリ「他の受検者・受検希望者」には、他の受検者・受検希望者に伝えたい言葉、伝えていることを聞き手に託す語りや他の人はどうしているのかについて聞き手に質問する語りが見られた。その他、インタビューの終了後に検査の現状や体調についての質問などがあり、これらの発話は聞き手を遺伝カウンセリング提供者である認定遺伝カウンセラーと見なしたうえでの発話だった。

【分析 3】に該当した他者として語り手に共通して表れたのは、「夫」、「親」、「きょうだい児」、「語り手のきょうだい」、「親類」、「友人」、「職場の人」、「産科の主治医や看護師」、「遺伝科の担当者」、「胎児」、「ダウン症(をもつ人)」、「障がい(をもつ人)」、「他の受検者・受検希望者」、「インターネット」だった(表 4)。このうち、「夫」、「親」、「胎児」については全ての語り手で言及があり、「インターネット」、「主治医や看護師」についての語りは 90%以上の語り手に共通して表れていた。さらに、本研究の結果、先行研究で設定していた指標³ 2) 特定の他者と 3) 世間/社会の間に 4) 「特定の他者」と「イメージ」とが混在した群があることが示唆された(表 2)。それは、「胎児」に関する語りであり、特定の他者として「今まさにお腹の中にいる胎児に対する思い」が語られる部分と、将来の子ども姿が時にダウン症や障がいと関連づけてイメージとして語られる部分、いくなれば「仮置きの子ども」への語りが見出された。胎児についての語りには、自分の子どもであると感じることができ、その存在を認め愛着をもつ手前の段階での心境も表れていた。NIPT 受検時には、胎児は実際に語り手の体の中にいる者でありながらも、今後自らの選択によってはいなくなる可能性のある者として家族とも異なるやや距離を置いた立ち位置にあった。その後、検査結果陰性が確定し、また胎動が感じられるようになってくるにつれて、胎児に対する語り手の心理的距離は狭まり、「家族」である自分の子どもへと変化していた。その他の「きょうだい児」、「語り手のきょうだい」、「親類」、「職場の人」、「友人」、「遺伝科の担当者」、「胎児」、「他の受検者・受検希望者」についての語りでは、近隣に住む夫の親類に対する語りがインタビュー全体時間の半分以上を占める例や実の両親との関係性についての話が中心となる例など、語り手によって異なる他者・社会の語りには、語り手の置かれている状況の個性が表れていた⁶。

生殖補助医療を受けた群については、同じ治療を受けていたとしても一度の治療で妊娠した語り手もいれば何年にもわたり何度も治療を行った末に妊娠した語り手もあり、治療の不妊経験は個人差が大きかった。語りの 30%以上が不妊治療についての語りであった例もあれば、6%程度の例もあった。語りの内容は、治療法の詳細、治療を都市部で受けた後に地元の産院での

受け入れを断られた経験、受けられる不妊治療に地域による格差があることへの言及などだった様々だった。その中において「流産」についての語りは、生殖補助医療を受けた群のみで見られ、生殖補助医療を受けた群計6名中4名が流産を経験していた。「自分が流産するとは思わなかった(0012, 0015)」, 「また流産してしまうのではないかと思ひ不安(0012, 0014, 0015)」という流産への不安を抱えながらNIPTを受けていることが示唆された。「子どもを選ぶことへの罪悪感」については、自然妊娠群、生殖補助医療を受けた群によらず語り手によっては言及されていた。

本研究の結果として、妊婦のNIPT受検経験においては、家族や周囲の人、社会といった「他者」が大きな影響をもっていることが明らかとなった。妊娠は妊婦の体内で経験されるごく個人的な出来事であると同時に、社会との相互作用によって形作られるものでもある。語りにも現れる他者・社会の視点から解析を行うことで、参加者を取り巻く社会的な状況、キーパーソンを把握できるとともに、検査の情報源やNIPTの社会的側面について明らかにできる可能性が示唆された。また、自然妊娠群と生殖補助医療を受けた群の間では共通するカテゴリが多い一方で、一人ひとりの語りには個別性が見られたことから妊娠方法によらずクライアントのもつ背景の多様性に目を向けた対応が必要であろう。

本研究は家族歴や胎児異常がなくNIPT結果が陰性だった人の経験である。インタビュー参加者のみの経験ではあるが、NIPT受検者のうちで人数としては最も多い群であり、その受検経験の共通性と多様性を示すことはNIPT受検経験の一側面を浮き彫りにするものと言える。しかしながら、NIPT受検経験は家族歴ありや陽性例、陰性例であっても他の先天異常の帰結となった例では大きく異なると考えられる。NIPT受検経験の総体を知るにはこれらの群への研究が必須である。

表1 時系列を進めるための質問項目

具体例
子どもさんを授かりたいなと思ったあたりの話から伺えますか
(不妊治療を考えはじめたのはいつ位からでしょうか)
(不妊治療を受けている間はどうか)
NIPTのこと考えはじめたのはいつ位からでしょうか
実際に検査を受けにきた時はどうか
検査の結果を待っている間はどうか
検査の結果を聞きに来たときはどうか
結果を聞いた後から、今日までの間はどうか

表2 【分析3】ストーリー内の他者の解析結果

1)	家族	「夫」, 「親」, 「きょうだい児」 「語り手のきょうだい」が該当
2)	特定の他者	「親類」, 「友人」, 「職場の人」, 「産科の主治医や看護師」, 「遺伝科の担当者」が該当
4)	「特定の他者」と 「イメージ」とが混在した群	「胎児」, 「ダウン症(をもつ人)」, 「障がい(を持つ人)」 が該当
3)	世間・社会	「インターネット」, 「他の受検者・受検希望者」が該当

(山本, 2018, 表4 一部改変)

<引用文献>

1. 日本産科婦人科学学会 ART データブック 2012
<http://plaza.umin.ac.jp/~jsog-art/2012data.pdf>
2. 厚生労働省平成 24 年人口動態統計の年間推移
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai12/>
3. 山本佳世乃, 2015 『ライフストーリー分析指標の開発: 遺伝カウンセリングへの応用を目指して』東京: 風間書房. pp. 270-271.
4. 桜井厚, 2002 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』東京: せりか書房. pp. 119-126.
5. 桜井厚・小林多寿子(編著), 2005 『ライフストーリー・インタビュー 質的究入門』東京: せりか書房. pp. 43-163.
6. 山本佳世乃, 無侵襲的出生前遺伝学的検査 (NIPT: Non-invasive prenatal testing) を受けた妊婦の経験 関わりの中での NIPT 経験, 語りの地平 ライフストーリー研究, 査読有, 3 巻, 2018, 24-46.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 1 件)

山本 佳世乃, 無侵襲的出生前遺伝学的検査 (NIPT: Non-invasive prenatal testing) を受けた妊婦の経験 関わりの中での NIPT 経験, 語りの地平 ライフストーリー研究, 査読有, 3 巻, 2018, 24-46.

[学会発表](計 4 件)

山本 佳世乃, 谷口 仁美, 福島 明宗, 人々の中での NIPT 受検経験, 第 42 回 日本遺伝カウンセリング学会学術集会, 2018

山本 佳世乃, 福島 明宗, NIPT (無侵襲的出生前遺伝学的検査) 受検の経験についてのインタビュー調査, 第 41 回 日本遺伝カウンセリング学会学術集会, 2017

山本 佳世乃, 福島 明宗, NIPT (無侵襲的出生前遺伝学的検査) 受検の経験についてのインタビュー調査, 第 14 回 日本質的心理学会全国大会, 2017

山本 佳世乃, NIPT (無侵襲的出生前遺伝学的検査) 受検の経験についてのインタビュー調査, 第 13 回 日本質的心理学会全国大会, 名古屋市立大学, 2016

6. 研究組織

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: 福島 明宗

ローマ字氏名: Akimune Fukushima